2020.07.18.
T.Kobayashi

荒ぶる川に戸惑う日々悲し
～ 今年も豪雨被害続出 ～

今年も豪雨が襲いかかってきた。球磨川・人吉・久留米・筑後川・日田・湯布院・飛騨川・下呂・・・・
多くの人が命を奪われ、家を失い、田畑を流されることになってしまった。
いくらかの縁があった町は、地形が頭に浮かび、町並みが脳裡に流れる。そんな町が水没した姿を見るのは生々しくて怖い感じがする。
テレビのニュースや新聞が報道する情報を見ながら、肩に力が入ってくるし、凝視する目が疲れてくる。
現場に居る人が感じる恐怖は、こんなものではないに違いない。
テレビ・ラジオ・新聞などで目にした光景や情報から、「豪雨被害を語る都々逸」を連作してみることにした。
自分にとっていくらかでも糧（かて）になるように、「五十音順・一字決まり折り込み都々逸」という難題に挑んで見た。

<あ>　あらま大変　あふれてきたわ　あわてて逃げると　危ないよ
<い>　いつも見ている　田舎の小川　勢い増してる　いつの間に
<う>　家（うち）に居るのか　家から出るか　うろうろする間に　運の尽き
<え>　映画で見るよな　映像ばかり　えらいことです　遠方は
<お>　思いもせなんだ　お家に水が　おなかもびっしょり　恐ろしや
<か>　川の合流　かなりの危険　河川増水　欠ける土手
<き>　窮屈な谷を　急流走り　急な斜面が　切れ落ちた
<く>　球磨（くま）の流れと　暮らした日々が　黒い流れに　崩れ去り
<け>　景色一変　渓谷の村　今朝もまた鳴る　警報が
<こ>　この世の終わりか　この目に残る　故郷が沈むよ　壊れるよ
<さ>　沢の流れが　坂道下り　裂け目に入って　坂崩れ
<し>　思案投げ首　しみ込む水に　死活問題　試練の日
<す>　好きな町です　素敵な田舎　すさまじい水　隙間なく
<せ>　せめて位牌を　背中に背負い　生死をともにと　せがむ妻
<そ>　そうだ避難だ　そろそろ準備　そのうち濁流　そばに来る
<た>　助けてください　たっぷり水が　たまって屋根上（うえ）　立つ瀬なし
<ち>　筑後の農地が　沈没したよ　力なく立つ　中老が
<つ>　次は我が身と　妻身支度を　つつがなき身に　ついホッと
<て>　天災地変で　天地が返る　天の恵みか　天命か
<と>　倒木流れて　通せんぼうで　当分行かれぬ　通り道
<な>　中洲あったが　流されて消え　長い想い出　泣き沈む
<に>　二階まで水　逃げ場は屋根だ　肉付き良いので　荷が重い
<ぬ>　抜けた壁穴　ぬめぬめ泥が　抜き手切りつつ　抜け出した
<ね>　ねぐら襲われ　根こそぎ流れ　寝首欠かれた　猫親子
<の>　のれん残った　飲み屋は続く　のたれ死にせぬ　望みあり
<は>　派手にやられた　畑の野菜　白髪夫婦が　運び出し
<ひ>　人吉の次は　飛騨路の谷間　被害続出　ひどい雨

<ふ>　不足・不満も 不平も言わず 夫婦仲良く 復旧へ
<へ>　部屋のお掃除 ヘドロのような 変な汚れが へばりつき
<ほ>　本が流れて 畔（ほとり）に着いた 芳名ないかと 本めくり
<ま>　真っ直ぐ流れぬ 曲がった川は 混ざらぬ支流が まずあふれ
<み>　見えた河床 水面（みなも）の光 見るも恐ろし 水の音
<む>　むすめふさほせ 紫式部 向こう岸にも 無地ひとつ
<め>　面倒見てきた 雌鳥（めんどり）たちよ 目頭おさえて 冥福を
<も>　元の景色が 戻るだろうか 森も小川も もう一度
<や>　山が崩れて 山肌露出 止まぬ土砂降り やや不安
<ゆ>　夢か真か 夕べの豪雨 行く末案じて 憂鬱に
<よ>　嫁に引かれて 夜中に避難 夜明けの景色に よかったわ
<ら>　雷鳴とどろき 落石響き 落命した友 落涙す
<り>　リスクと言われど 粒々辛苦（りゅうりゅうしんく） 離村はできない 理屈抜き
<る>　累代つながる 類縁ありて 流浪するまじ 縷々（るる）ここに
<れ>　例外雨量が 連日続く 列島どこまで 劣弱か
<ろ>　ローソク消えそう 漏水ひどく 老女拝むは 六地蔵
<わ>　割れたガラスに 湾曲の家具 我が家めちゃめちゃ われ自失
<ん>　運も力と 云々するが 雲散霧消で 運も逃げ

そして、「ん」まで辿り着く頃には、広島県・島根県・・・と新たな地域に被害が広がってしまった。
梅雨が明け、真夏に入り、台風シーズンを迎えるこれから、多くの人々にとって「不安は尽きない夏」の始まりになった。痛手大きい我が町、傷深き故郷の町・・・・、再び明るさを取り戻せる日々を願って、「こうずい」の折り込みで結びとします。

これは恐ろし 雨量もまれな 随所あふれて 痛ましや
怖い思いで 雨中を避難 ずぶ濡れ体で 息を飲む
こんな時こそ 後ろを向かず ずばり元気に 行（い）くべしか

以上